

特集にあたって

—— ドミニク・ラバテ氏の講演（2005. 9. 15）について ——

高 木 裕

昨年9月に、ボルドー第3（ミシェル・ド・モンテーニュ）大学との研究者交流の一環として、ドミニク・ラバテ Dominique Rabaté 教授を招聘し、講演会（この原稿は逸見先生が訳出され、この号に掲載されているので、お読みいただきたい）を開催した。講演は、われわれの「声とテキスト論」研究プロジェクトにとっては大いなる刺激となり、講演後の懇親会でもプロジェクト参加者との活発な意見交換があった。因みに、私がコーディネータを務めた日本フランス語・フランス文学会（2005年度秋季大会）のワークショップ「テキスト論の行方」において、ラバテ氏の講演と彼の業績について報告も行った。ラバテ氏は、ボルドー第3大学において、近現代のフランス文学を通底する主題研究を意欲的にこなし、叢書も刊行している「モデルニテ」研究グループの代表を務めている。みずからも、次々とフランス文学研究では定評のあるコルティ社から、著作（『ルイ＝ルネ・デフォレ研究 —声と量感—』 *Louis-René des Forêts : la voix et le volume* 1991, 再版2002, 『消尽（汲み尽くし）の文学の方へ』 *Vers la littérature de l'épuisement* 1991, 再版2004, 『声の詩学』 *Poétique de la voix* 1999）を陸続と公刊し、フランス現代文学の研究者として注目されている。

今回の講演では彼の文学批評の方法論がきわめてわかりやすい形で語られていた。これまでの文学理論では、＜声＞の問題へのアプローチはほとんど＜声＞の生成のメカニズムに関わる「言表」*énonciation* の諸問題としてとらえられてきた。＜声＞の特質、＜声＞の効果は、ディスクールの人称の世界、指呼詞による *ici et maintenant* の現出、コミュニケーションの場のシミュラクルなど、言表の位相と関連づけられてきた。散文作品における＜声＞の問題について、「語り」の特質、構造を体系化したジュネットの物語論 *narratologie* とは異

なる方法で、ラバテ氏は、言表の特異性（彼は「<声>の効果」と呼ぶ）、エクリチュールの本質的特性の角度からアプローチしている。ここでは、講演「声の詩学」を簡単に紹介するにとどめる。

ラバテ氏の研究の出発点は、ルイ＝ルネ・デフォレの小説『おしゃべり男』Le Bavard の奇妙な声の分析にある。この声の特異性に言表の言語学の方法を用いてアプローチするところから始まり、第二次世界大戦後の小説、特に一連の *récit* と名づけられた作品群に関心を広げてゆく。「信用できない語り手」*narrateur non fiable* が跋扈する現代文学の潮流の中で、*récits* を引き受ける主体が死んでいるという存在様式の一連のテキスト群をさらに「消尽（汲み尽くし）の文学」*littérature de l'épuisement* と名づけ、その特徴について、「消尽（汲み尽くし）の文学、なぜならエクリチュールに割りあてられた目的がむしろ、その主体を汲み尽くし（消尽させ）、その最終段階まで至り、いまわの際の言葉に耳を傾けるかのように、まさにその死に際に、一つの達成を見いだすことなのであるから。」と語っている。ラバテ氏は言表の特異性を<声>の効果と名づけ、さらに次のように言表行為の主体と言表内容の主体との間にある断裂に注目する。

La voix - dissociée de sa source (par le caractère écrit du texte) - révèle la faille qui distingue toujours un sujet de l'énonciation du sujet de l'énoncé auquel il ne saurait jamais se réduire mais dont il dépend pourtant pour toute identification.

Lire les effets de voix, c'est ainsi faire deux choses intimement liées. C'est décrire les effets produits sur le lecteur, les prises à partie et l'étrange sentiment d'interpellation (souvent violent et qui cause un malaise) mais aussi comprendre que la voix qui s'empare ainsi de notre attention et la malmène ne le fait pas gratuitement, ou par simple jeu.

ラバテ氏の仕事の中心部分はテキスト批評であるが、声の問題には理論的かつ歴史的にアプローチしている。20世紀小説の語りの方法の源泉を19世紀リア

リズム小説に見いだし、そこから説き起こす作業にも取りかかっており、来年度、刊行予定の著作において展開される由。ラバテの読解は、言表の逆説、テクストの異質性、物語論的横滑りに向けられ、ラカン派の精神分析学にも接近する。

Ma pratique de l'analyse textuelle, basée sur l'attention la plus grande aux effets de voix, joue donc de tous les moyens de la linguistique de l'énonciation pour repérer les heurts ou les ruptures du texte, mais une linguistique de l'énonciation certainement influencée par la psychanalyse qui reconnaît avec Lacan le divorce entre sujet de l'énonciation et sujet de l'énoncé, ou qui entend dans certaines phrases ou dans certains fantasmes le jeu pluriel et polyphonique de l'inconscient et des personnages qui l'animent.

声の問題を扱うことは必然的に主体の問題に突き当たるが、彼にとっての主体は形而上学的な主体ではない。彼に拠れば、声とはつねに複数の主体、他の主体に取り憑かれた声であり、声を問題にすることは、精神分析の方法を援用しながら、この単数かつ複数の主体を取り上げることである。「統合された身体」*corps unifié* というロラン・バルトの言葉を引用して、ラバテ氏は、「この統合された身体の享樂とは、私なりに言えば、声が約束する（前に置いてみせる）、自らに約束する（自らの前に置いてみせる）、ものです。このように私が約束の次元を前に置いてみせるのは、それはつまり、その信念と魅惑の効果とともに、この約束のありもしない擬餌の部分を指し示すためです。」*Cette jouissance du corps unifié, je dirai pour ma part que c'est ce que la voix promet, se promet. Si je mets ainsi en avant la dimension de la promesse, c'est pour désigner la part de leurre imaginaire de cette promesse, avec ses effets de conviction et de séduction* と語り、〈声〉と主体の関係について分析し、最終的に〈約束された自分の声を追い求める主体〉*sujet en quête de sa voix promise* という表現で定義する。

〈声〉というタームで何を指し示すのかは、文学批評のレベルでも、さまざまであり、定義づけることは難しい。ジュネットのナラトロジーのような、

ディスクールの理論，あるいは言表行為論に収まることができないものを含んでいることは確かであり，そこに「言表」「主体」「身体」というタームが分かちがたく絡み合っているのである。それゆえ，〈声〉によって，文学理論的なものを構想することはその本質から言って逆行することであり，理論によって絡めとれないものを丹念に拾い集め，むしろ問題の所在をあまねく照らし出す仕事が課せられるのであろう。

最後に，今回の人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」の特集について，一言だけふれておく。昨年に引き続いて「声とテキスト論」プロジェクトの特集を組んで頂いたことに感謝申し上げたい。ただ，当初，ラバテ氏の講演会原稿の翻訳，鈴木孝庸氏の論文に加えて，廣部俊也氏の論文も掲載予定であったが，諸般の事情により，次号の「人文科学研究」への掲載となったので，この点について，御理解を賜りたい。